

# 莫言の作品『豊乳肥臀』における「母親像」分析

## An Analysis of the Image of Mother in Mo Yan's Novel

### *Big Breasts and Wide Hips*

孫 佳 宇

SUN Jiayu

#### 目次

1. はじめに
2. 莫言について
3. 上官魯氏にみる「母親像」
  - 1) 封建社会に反抗する上官魯氏
  - 2) 粘り強い精神力を持つ上官魯氏
  - 3) 強い感受性を持つ上官魯氏
4. おわりに

## 1. はじめに

1996年、莫言の長篇小説『豊乳肥臀』が出版された。当作品の主人公である上官魯氏は、これまでの中国文学に度々登場してきた「母親像」とは異なり、中国封建社会の価値観や倫理観に大きく反抗している点がとくに注目された。莫言は、この作品において一連の不倫を始め、母親の出産や露骨な性愛場面などについて描いた。『豊乳肥臀』が発表された当時、中国の文学界では大きな論争が巻き起こり、当該作品が文学賞に値するかどうかをめぐり評価が大きく分かれ、マスメディアにも大々的に取り上げられた。

私が最初にこの作品と出会ったのは大学時代である。初めてこの本を読んだときは、作品中の内容を深く理解することができなかった。しかし、結婚して母親となった今、『豊乳肥臀』に描かれた母親に大いに共感するようになった。それは、単に母親になったからというだけではない。作品の中で、上官魯氏は9人の子どもを抱え、波瀾万丈な子育て人生を送っている。私は、人生の全てを子どもに捧げて逞しく生きていく上官魯氏の生命力溢れる姿に、そして、時代や世代を超えて母親が子どもに注ぐ普遍的な母性を感じ取ったのである。

莫言は、作品の中で上官魯氏にいくつかの特色を持たせた。それは、閉鎖的な社会に対する反抗心、粘り強い精神力、強烈な感受性、道徳・倫理をも破る大胆な行動力などである。これらの特色は、閉鎖的な社会においては不道徳であると見なされる場合が多い。しかし、彼女はなぜ敢えてそのような生き方を選んだのだろうか。

中国文学における母親は一般的に、家族のため、子どものため、自己犠牲を強いられながらも辛抱強く生きていく。そして、このような人生は、数千年に及ぶ中国父権社会において称賛され続けてきた。しか

し、莫言はこの作品を通して、封建社会に反抗し、大胆な行動を以て強い生命力を子どもに注ぐ「母親像」をリアルに描き出したのである。

莫言の他の作品の中にも「母親」は登場し、そこから莫言の「母親像」を考察することは可能である。しかし、『豊乳肥臀』以前の作品では、父権社会の中で称賛され続けてきた「母親像」がほとんどである。彼女たちの生き方は、現代の母親像からかけ離れており、『豊乳肥臀』において初めて、伝統社会の価値観や倫理観に対抗した新しい「母親像」が登場したと言っても過言ではない。

私が本論において考察の対象とした『豊乳肥臀』は、合わせて3版まで出版されている。第1版は1996年1月に出版され、後に過激な描写を削除した第2版が2001年に出版された。本論では第1版を考察の対象としており、それは、第2版以降は批判を受けて過激な性描写などが書き換えられ、または削除されたからである。

私がここで注目したいのは、伝統社会の観念を脱ぎ捨て、生命力溢れる「母親像」についての描写である。このような生き生きとした母親像は、核家族化によって母親になることに不安を持つ現代の女性たちに新たな希望を与えてくれるかもしれない。現代の女性にとって、母親になることは決して生命を受け継いでいくだけのことではない。家事・育児・就労といった幾つもの役割を一人でこなさなければならず、心身ともに疲労困憊して、通常精神力ではとても耐えられない人生経験といえる。しかし、莫言の「母親像」からは、いかなる困難に遭遇しても希望を持ち続ける姿勢が見受けられる。莫言の描く「母親像」は、ある意味において現代の母親となることに不安を抱える女性たちに希望と勇気を与える原動力になれるのではないだろうか。

具体的には、上官魯氏の特色として以下の三点に注目したい。これらの特色は、作品を通じて貫かれた上官魯氏の生き方とも言えよう。

- ①封建社会に反抗すること
- ②粘り強い精神力をもつこと
- ③強い感受性をもつこと

本論は、この作品から具体例を抽出し、これらの特色を上官魯氏がいかなる行動で示したかについて考察したものである。それから、上官魯氏の「母親像」にはどのような要素が含まれているかについて分析し、莫言自身の母親である高淑娟と上官魯氏の「母親像」についての比較分析を試みた。

## 2. 莫言について

莫言（ばくげん、モーイエン、1955年～）の本名は<sup>グアンモイーエ</sup>管謨業であり、莫言はペンネームである、漢文ふうで読めば「言う莫かれ」だが、なんと巨大な語部であろう。莫言は1981年に『春夜雨霏霏』（『春夜に降りしきる雨』）で作家デビューし、2012年にはノーベル文学賞を受賞した<sup>1</sup>。その後、魔術的リアリズム<sup>2</sup>によって民話、歴史、現代を融合させた作品を次々に発表し、本国ばかりでなく数多くの言語に翻訳され海外でも高く評価されており、今ではアジアで最も注目されている作家の一人となった。

莫言の代表作『紅高粱』（『赤いコーリャン』）は、映画化した後に日本でも公開され、話題となっただけでなく、ベルリン国際映画祭で金熊賞（最高作品賞）を受賞した。莫言は自身の親族関係を軸に文学世界を構築する作家で、その女性描写は、これまでの現代中国文学にはない作風である。

<sup>1</sup> 2000年にノーベル文学賞を受賞した高行健は、受賞当時すでにフランス国籍を取得しており、2012年に中国籍作家としては莫言が最初の受賞者である。

<sup>2</sup> 魔術的リアリズムとは日常にあるものが日常にないものと融合した作品に対して使われる芸術表現技法で、主に小説や美術に見られる。幻想的リアリズムと呼ばれることもある。

莫言は1955年に後の作品の舞台ともなっている山東省高密県の農民の子として生まれ、幼いころから食べることもままならない貧しい生活を送っていた。小学5年生の時に始まった文革のために学校も中退となり、牛飼いとして働くことになった。牛しか話し相手がおらず一人妄想にふけるうち、ついには独り言を言うようになり、その後工場で働くようになってその悪癖は治らず、母親からあまりしゃべるなど戒められたという。これらの体験が作家莫言に与えた影響は大きかったと思われる。また、「飢餓と孤独がわが創作の財産」<sup>3</sup>として、それらが創作活動の原動力となっていることを自身も認めている。

1967年には人民解放軍に入隊し、そこで早くから抱いていた「作家になりたい」という夢を実現するために1981年から創作活動を開始し、1985年には『透明な人參』で文壇デビューした。1986年に発表した『赤い高粱』には大きな反響があり、その後の中編4編を合わせた『赤い高粱家族』が翌年出版されると、文壇でも高い評価が与えられた。1988年に張芸謀監督により映画化され、ベルリン映画祭で金熊賞を受賞するなど、世界的に注目される作家となった。それ以降の作品としては『酒国』（1993年）、『豊乳肥臀』（1995年）、『白檀の刑』（2001年）、『四十一砲』（2003年）、『転生夢現』（2006年）、『蛙鳴』（2009年）などがあるが、これらの作品はすべて日本語に訳されている。「日本はアジアだけではなく、世界で最も早く莫言の作品を翻訳した国である。」と研究者の王俊菊は述べる<sup>4</sup>。1989年、井口晃が『現代中国文学選集：莫言赤い高粱』を翻訳したが、売り切れて再発行となった。その後1991年に藤井省三、長堀祐造が翻訳した『莫言短篇小説集』が出版された。莫言は日本の美しい環境、健康的な飲食、日本人のきめ細かい仕事ぶりや礼儀正しさが大好きという知日派である。大江健三郎が1994年にノーベル文学賞受賞講演で、「中国のきわめて良質な小説家」と莫言の名に触れて以来、二人は親しく交際した。2006年に北京で中国社会科学院が開催した「大江健三郎文学研究会」では、本人を前に莫言は格調高く「大江氏が私たちに与える啓示」を講演している。

1994年に亡くなった母親の高淑娟は纏足していたようで、旧時代の最後の女性と言える。合わせて8人の子供を産んだが、4人しか育たなかった。母親は厳しい性格の夫から終始末っ子の莫言をかばったようだ。この母親への莫言の熱い思いを莫言はノーベル文学賞受賞講演の時に表明した。莫言が語ったものを見ると、この一族とそれを取り巻く高密県東北郷そのものが豊かな物語を孕んだ土地だったことが分かる。

### 3. 上官魯氏にみる「母親像」

『豊乳肥臀』は莫言にとって最も重い作品である。莫言も「あなたは僕のほかの作品を読まなくてもいいのですが、もし僕を理解したかったら、是非僕の『豊乳肥臀』を読んでください」<sup>5</sup>と言っている。この小説を理解することで、莫言の母親に対する情念を明らかにすることができる。莫言は度重なる苦難を乗り越え、頑強に生きる母親——上官魯氏を描き出している。

まずは作品のあらすじから、「上官魯氏がどのような要素を内包した母親なのか」ということを以下に見ていきたい。

日本軍が村に攻め込んで来るといふ噂の中で、女の子ばかりたてつづけに7人も産み、男の子を産めなかったが故に亭主や姑から虐待のかぎりを尽くされた上官家の嫁の魯氏は、8人目の子を産むべく難産で苦しんだ。折しもロバも難産の最中。そんな中、男の孫の顔を見られますようにと最後の望みを託し、姑の呂氏はロバの世話に大わらわ。ところが、やっと生まれた一男一女の双子は仮死状態であった。二人は

<sup>3</sup> 莫言 「飢餓と孤独がわが創作の財産である」 アメリカスタンフォード大学での講演 2000年  
吉田富夫『莫言神髓』136頁 中央公論出版社 2013年

<sup>4</sup> 王俊菊 『莫言与世界：跨文化視角下的解读』37頁 山東大学出版社 2014年

<sup>5</sup> 莫言 王尧「从红高粱到檀香刑」『当代作家评论』2002年第1期

日本軍の軍医に救われるが、魯氏の亭主はじめ、多くの村人が殺され、呂氏は気が変になった。これ以降、魯氏は8人の女の子と一人の男の子を抱えて、抗日戦争から国共内戦、毛沢東時代、改革開放時代へと、半世紀を超える時代を生き抜くことになる。

小説の主体部分で、莫言は上官金童を語り手にして、上官魯氏の波瀾万丈な子育て人生を描いている。彼女は二代にわたって、自分の子どもと娘の子どもを育てあげた。莫言の関心は、上官魯氏が子どもたちの生命をどうやって延ばせるかに集中している。「人間には生もあれば、死もある。死は簡単だが、生きることはとても難しい。難しいからこそ生きていかなければ。」これが彼女の生命への強い信念である。

『豊乳肥臀』の最後に、驚くべき種明かしがある。上官魯氏の夫の上官寿喜はじつは子供のできない種なしで、9人の子供たちはすべて複数の相手との不倫の結果だったのである。不倫のほとんどは、騙されたか、無理強いされたか、男の子欲しさのためかであったが、最後の双子の親はスウェーデン人牧師で、その二人だけは愛情の結晶であった。

以上のことから、上官魯氏は強い感受性や粘り強い精神力、そして封建社会に反抗するような大胆な行動力を持っていたことが窺える。しかし他方では、男の子を生むまで子供を産み続けるといった、封建社会的な考えもあることが窺えよう。

### 1) 封建社会に反抗する上官魯氏

莫言は、母親高淑娟が克服できなかった封建社会の縛りとそれに服従するしかない卑屈な精神を、上官魯氏にも持たせていた。それは、莫言の生きた時代の母親像にはありふれたイメージだったのである。莫言はこの克服不可の縛りを、上官魯氏にある意味克服させてしまっている。まずは、上官魯氏の境遇について見ることにしよう。

上官魯氏が六か月未満の時、両親は抗ドイツ闘争の中で亡くなった。その後、伯母と伯父に育てられた。上官魯氏を将来金持ちの家に嫁がせるために伯母は彼女に纏足を強いた。しかし、時代の変化とともに纏足の習慣がなくなった。彼女が17歳の時、伯母はこの状況下で仕方なく彼女を上官家の息子上官寿喜に嫁がせ、それから彼女の苦難の一生が始まった。結婚して何年か経ったが、ずっと子どもができなかった。夫の上官寿喜は、懦弱無能だが妻を殴るのは得意であった。自分の原因で子供ができないのに妻の上官魯氏のせいにし、子供を産めないがために「食うばかり、卵を産まない」と姑の上官呂氏に罵られた。

「このお腹の大きさは尋常ではないし、模様も変わっておって、男の子のようじゃ。これはおまえの運、わたしの運、上官家の運というもの。…… 息子がいなければ、おまえは生涯召使い。息子ができればこの家の主じゃ。わたしのことを信じるか？ 信じる信じないにかかわらず、おまえにどうできることでもないが、……」 「お姑さん、信じてますとも、このとおり！」 上官魯氏は心をこめてそう呟いたが、目の前の壁の暗褐色のしみが目に入ると、底知れぬ切なさが突き上げてきた。三年前だった。七番目の娘の上官求弟を産み落とすと、怒り心頭に発した亭主の上官寿喜に木槌を投げつけられ、頭が割れて、壁に血が飛び散った痕だった<sup>6</sup>。

ここから読み取れることは、姑と亭主に虐待される上官魯氏の様子である。上官魯氏はただ「息子が産めない」というだけで、亭主の上官寿喜に木槌を投げつけられ、頭から流血するという経験をしたのである。息子を産めと上官魯氏に迫る姑の上官呂氏と亭主の上官寿喜の様子は、鬼気迫るものがある。息子の産まない嫁は、それだけで一生を家族から扱き使われることになる。逆に、息子を産みさえすれば家の中

<sup>6</sup> 莫言『豊乳肥臀』(上) 17頁 平凡社 吉田富夫訳 1999年



での地位は上昇し、虐待されることもなくなる。そうして見ると、姑の言葉は、娘を産み続ける上官魯氏にとってはまるで呪いのようなものである。上官魯氏は呪いを甘んじて受けなければならず、呪いから解放されることはなかった。上官魯氏が子どもを産み続けたことは、息子を産みさえすれば虐待から解放されるという姑の言葉を信じたからである。そして、姑に言われたからだけではない。姑の言葉は、社会における価値観から生じたものであり、上官魯氏もまたそれを是としていたのである。それは、以下の引用からもわかることである。

「母親上官魯氏には一つの残酷な真理が分かってきた。すなわち、女は嫁にいかねばならず、嫁にいったら子供を産まねばならず、それも女の子だけではダメで、家の中での地位を手に入れるためには、是が非でも男の子をうまねばならない、ということである」<sup>7</sup>。

つまり、上官魯氏もまた封建社会の価値観に捕われた人物だったと言える。しかし、「息子が産めない」ことで、上官魯氏は追詰められていく。追詰められた果てに、彼女は不倫という手段に出た。この不倫という行為は、莫言の母親高淑娟にはない。女の子しか産んでいない、男の子を産めないというのは、封建社会の家庭の中で生きていく上で、どうしてもなく追詰められる欠点であった。両者の決定的な違いは、息子を産んだか否かにある。この一点が、上官魯氏を逃げ場のない選択へと追い込んでいった。夫以外の男性と子どもを作るという選択である。この選択に至るまでに、上官魯氏は、夫や姑の虐待にただ耐えていた。そして、子どもを産んでも、女の子ばかり産むために、家の中での地位を変えることはできなかった。

封建社会の中で不孝という行為には三つがあり、後継ぎが出来ないの一番の不孝である<sup>8</sup>という教条がある。封建社会で中国の女性たちは、父権社会の中で伝統的な「礼教」<sup>9</sup>を受け、支配される位置にあり、女性の居場所はほとんど家の奥に限定され、外の世界をまったく知らなかった。女性たちにとって唯一の進路は結婚することで、それはまた義務であった。結婚というものは、愛情に基づいて家庭をつくるものではなく、互いの家庭間の見栄の張り合いでもあった。そのため、上官家の息子と結婚することは、最初から不幸なことであったといえよう。当時の中国社会において、伝統的な礼教に基づき、女性は「従一而終（一に従って終わる）」と言われるように、終生一人の男性に従うという節を守り、再婚しないという道徳的な観念が強く、別居や離婚は考えられないことであった。しかし上官魯氏は、このような価値観によって虐待され続けることに正面から反抗した。

上官魯氏は、なぜ不倫をしてまでこのような価値観に反抗したのか。それは、彼女が自分の生命に執着したため、ともいえよう。姑と夫の虐待は、流血を伴うものだった。心身ともに長年虐待が続けば、廃人になるか、命を落とすことも考えられる。封建社会において普通の女性ならば、日々精神と肉体の虐待の中ですでに自殺していたかもしれない。しかし上官魯氏は、常に「心で強くなろう」という意志を持ち続けたのである。不孝の罪名を背負って生きたくない、姑と夫に虐待されたくない、と反抗のエネルギーを溜めていった。上官魯氏は結婚して長い年月の中でずっと子供ができず、家の中で姑と夫に罵られたり、殴られたり、もしそのままずっと子供ができなかったら、姑は伯母に実家に連れて帰れとまでも話した。子どもを産まなければ、家畜のようにやり取りされる。このような状況の下で、上官魯氏は伯父との間に子供を二人作った。その旧封建社会の圧力の下で自分の生きていく道を懸命に探していたのである。人としての尊厳を手に入れたかった。これは、生命の根源に正直で、健康的な思考であると考えられる。つま

<sup>7</sup> 莫言『豊乳肥臀』（下）297頁

<sup>8</sup> 「不孝有三无后为大」

<sup>9</sup> 封建社会における礼節や道徳

り、上官魯氏は生き続けるために、封建社会の価値観と倫理観に反抗したのである。

「この薄ノロ、叩くがいいさ。この二人は、おまえの種じゃないんじゃから。この魯璇児が、このあと千人生んだところで、この上官家の種じゃないんじゃ」<sup>10</sup>。

上官魯氏は自分の生殖能力を証明したかった。それは、封建社会に圧迫された彼女自身の価値を取り戻したかったのである。そのため、考えつく限りの手段で自分が母親になり、つぎからつぎへと種を借り、男の子を産むまで出産を続けたいと考えたのであろう。結局、上官魯氏は伯父の「拳骨の于」をはじめ10人の男性との間に9人の子供をもうけた。娘の来弟と求弟以外は全員、夫以外の人と子供を作って産んだのである。

上官魯氏は旧封建社会に反抗する大胆な行動力を持っていた。後継ぎの男児を生まなければならないという理不尽な要求のために、彼女は夫以外の何人もの男性と関係を持ち、父親の違う子を次々と産んだ。それは、彼女が旧封建社会制度に追い詰められた結果であった。子供ができなかったのは夫の原因ということが言えないので自分で生きていける道を探すことしかできなかった。上官魯氏は精神と肉体が絶え間なく虐待された状況の中で封建的な道德観念に反逆する道を歩いたのである。

上官魯氏との過ちを後悔する伯父に対して、上官魯氏は以下のように言った。

「『伯父さんのせいじゃない。…… 貞節な女であろうとすれば、殴られ、罵られ、離縁されるのに、間男して種をかりたら、逆に聖人君子だって。』…… 『〈据え膳食わぬは男の恥〉とか言うじゃない？』伯父はおのずと不安げに立ち上がったが、母親はあばずれ女みたいにやにわにズボンを脱いだ。……」<sup>11</sup>。

上官魯氏の台詞は赤裸裸である。彼女の言動は非常に積極的で、その生々しさに読者は仰天させられる。それにもかかわらず、彼女にとってのセックスとは子孫を存続させるための手段にすぎず、そこに快楽や性欲は必ずしも伴っていない。これは息子を産み、虐待から逃れ、上官魯氏としての価値を認めさせるための行為だったのである。

このような不道徳的な行為のため、上官魯氏はしばしば封建社会の犠牲者のように言われる。しかし、その原動力となっていたのは、強く生きようとする上官魯氏の心の在りようである。彼女には、封建社会に押しつぶされ、虐待され続け廃人になるという道もあった。彼女がその道を選ばなかったのは、彼女が生命力に溢れた人だからであり、生命を損なう虐待から逃れる必要があったからである。彼女は、このようにして封建社会の価値観を克服したのである。そして、それを克服させたのは、彼女自身が持つ生への執着であり、その執着こそが上官魯氏の生き方を力強くしたのである。

## 2) 粘り強い精神力を持つ上官魯氏

母親上官魯氏の一生（1900年～1995年）は苦難、災難、屈辱に塗れた時代であり、中国の激動の20世紀であった。この間、中国は日中戦争、国共内戦<sup>12</sup>、三反五反運動<sup>13</sup>、大躍進運動<sup>14</sup>、土地改革<sup>15</sup>、文化大革命

<sup>10</sup> 莫言『豊乳肥臀』（下） 298頁

このセリフは上官魯氏の言葉で、「魯璇児」は上官魯氏の幼名である。

<sup>11</sup> 莫言『豊乳肥臀』（下） 306頁～307頁

<sup>12</sup> 国共内戦 中国人民解放戦争、第三次国内革命戦争、中国共産党の全国統治を達成するに至った1946年6月から50年5月までの中国国民党と中国共産党との間の戦争である。

命、改革開放などを経験した。莫言が言うように、『豊乳肥臀』中の母親は生活の苦しみを味わい尽くし、通常の人が想像を絶する苦痛に耐えながら、頑なに生きてきた。小説の第一章で、日本軍が村に攻めてきて上官家の懦弱無能な二人の男性（上官福祿、上官寿喜）が殺され、姑上官呂氏も気が狂ってしまった。その後、上官魯氏が重責を担い上官一家を支えていた。彼女は生涯を通して飢餓や災難、戦争などを経験し、常に死の淵に立たされていた。彼女自身の命だけではなく、9人の子供の命も守らなければならなかった。小説の中では、飢饉の年代に上官魯氏は子供たちに食べさせるために行ったこととして、次のような描写がある。

「母親は祖母の葛籠を壊して、卵、なつめ、氷砂糖、それに長年保存してあった吉林省産の朝鮮人参などを取り出した。鍋の水が沸騰し、卵が中で躍る。姉たちを呼び込んだ母親は、盆を囲んで座らせた。鍋の中のを盆に掬い出すと、〈さ、みんな、食べなさい〉と言った。姉たちは、盆の中の食べ物を碗によそい、熱いまままでガツガツ食った。卵に当たった者は殻を剥く間も惜しみ、なつめにありついた者は種ごと呑み込んだ。母親はスープだけを飲んだが、三杯で盆は底をついた。みんなはしばらく静かにしていたが、やがて抱き合って泣き出した」<sup>16</sup>。

上官魯氏は、姑が隠し持っていた高価な食物を持ち出し、子どもたちに食べさせた。姑はすでに精神病に罹っており、上官魯氏は姑の持ち物を自由にできたのである。子どもたちの空腹の度合いは、彼らの食べ方に如実に表わされている。食べ物の熱さを気にする暇もなく飲み込み、皮や殻や種を気にする間もなく呑み込んだ。飢餓に喘いでいた時間は、上官魯氏や子どもたちにとって、自分たちが生きている事を感じ取るこのできない時間でもあった。

国共両党による内戦期間中、母親は子供たちを連れて避難する途中で、飢えと寒さにさいなまれる状況の中で苦しみを嘗め尽くし、きわめて困難な環境で上官魯氏は毅然として尋常ではない決定をした。子供たちを連れてあちこちで避難せず、国共両党交戦中の高密東北郷へ戻る決意である。そして、母親上官魯氏は子供たちを連れて銃弾の雨をくぐり抜け、自分が育てられた土地、今は目に入るものは傷跡ばかりの高密東北郷に戻ってきた。それから、上官魯氏は目まぐるしく変化する時局の中でも終始変わらず自分の子どもたちを養育した。彼女は善良、人を助け、生命を大切にする。苦難な歳月の中で彼女は堅忍、頑強な生命力と無私で献身的な精神及び偉大な母性愛で上官家の子孫を養育した<sup>17</sup>。

しかし、上官魯氏は子どものために盗みをするまでになってしまった。

<sup>13</sup> 三反五反運動とは1951年11月から1952年8月にかけて展開された。官僚の汚職腐敗と資本家の不法行為とを批判・摘発する政治運動。「三反」は1951年に提唱された国家機関または国营企業に対する指針。「反貪汚」（反汚職）「反浪費」「反官僚主義」。「五反」は1952年に提唱された私営企業に対する指針。「反行賄」（賄賂しない）「反偷税漏税」（脱税しない。「偷」は「盗む」の意。）「反偷工減料」（仕事の手を抜き、原料をごまかさない）「反盗騙国家財産」（国家財産を盗まない）「反盗竊国家経済情報」（国家経済情報の悪用をしない）。

<sup>14</sup> 大躍進政策（1958年—1960年）は、毛沢東主導の下に1958年から60年にかけて、ソ連をモデルとした第1次五年計画（53—57年）から離れて、人民公社の設立、また大衆動員によって、鉄鋼・穀物生産などをきわめて短時間に、急激に増産しようとし、急進的な理想社会の実現を目指した運動である。

<sup>15</sup> 土地改革 土地所有制度の変革、一般的に、少数の地主が集中的に所有している土地を、実際に耕作に従事する農民（多くは小作農）に分配し、自作農を創設する社会改革をいう。

<sup>16</sup> 莫言『豊乳肥臀』（上）69頁

<sup>17</sup> 母親上官魯氏は8人の娘と1人の息子を養育した。次に男の子が生まれるようにと、来弟（ライディー）、招弟（チャオディー）、想弟（シャンディー）領弟（リンディー）などと弟を待ち望む意味の名をつけられた彼女たちは、いずれも激しい性格の持ち主で、日本軍傀儡軍隊長の嫁になる者、馬賊の頭目の想い者になる者、共産ゲリラ隊長と結婚する者、アメリカ人飛行士の妻になる者など、上官家の娘たちはそれぞれの運命があり、彼女たちの恋愛、結婚、子供を産むなど、全ての物語は母親上官魯氏を中心に展開された。



「毎日退勤前になると、母親は製粉所の暗がりに紛れて、狂ったように穀物を呑み込んだ。胃袋がずっしりと重くなる。喉元までぎっしり詰め込んでどると、水を張った木の盥の前に跪いて、吐いた。穀物——貴重な、憎たらしい、血の糸を引いた胃液まみれの穀物が、ガラガラ、ガラガラガラと、盥に吐き出された。…… やがて吐き終えた母親は、梨の木の下の微かな星光かりをたよりに、盥に手を伸ばすと、穀物——その日吐いたのは豌豆だった——をすくい上げて、しっかり握り締め、ついでそろそろと拳を解いて、丸々とした黄色い粒を一粒ずつ、惜しみ惜しみ、ポトンポトンと水中に落としていった。…… 母親が星明かりの下で、満開のヒマワリのような幸せの笑みを浮かべるのを目にし、ひび割れた声で言うのを聴いた。『おまえ、これでたすかったよ！』<sup>18</sup>

狂ったように穀物を呑み込んだ上官魯氏は、この時自分の子どもの命のことしか考えていなかった。上官魯氏もまた、飢餓に喘いでいたはずである。また、豌豆を喉元まで詰め込むとなると、身体に掛かる負担は如何ばかりであろう。呼吸もできず、盗みが発覚する後ろめたさや恐怖に苛まれ、嘔吐に耐えられたのは何故であろう。彼女の生命の根源である子どもの命が奪われる危機に瀕し、彼女は極限状態に追詰められたのである。そうでなければ、このような方法で食糧を盗み出すことなど、思いもよらなかったはずである。上官魯氏この食糧の盗み方についての描写は、読者に深い印象を与えた。これは、莫言自身の母親がかつて行った行為だからである。莫言の母親が食糧を盗んだのもまた、飢餓の時代であった。「考えつく限りの手段で子どもたちの命を守っていきたい」と願う母親が、飢餓によって子どもの命を奪われる情況に置かれた時、手段を顧みず子どもを守ろうとする母親の生々しい在り方が描写されている。

また、上官魯氏は自分の胃袋で豌豆を盗んで家に帰った後すぐ吐き出して洗って粉にして水で交ぜた後、子どもたちに食べさせた。何故、上官魯氏は盗んできた豌豆を煮なかったのか。それは、上官魯氏が食べ物を得たことを周囲に悟らせないためである。調理のとき、火を使用すれば煙突から煙が立ち上る。すると、煙を見た人に家の中に食べ物があると知られてしまう。この時は飢饉が起こっており、盗みによってしか食べ物を得る方法はなかったのである。それは、上官魯氏が一粒一粒の豌豆を、まるで高価な宝石のように扱っていることから伺える。煙が立ち上れば、上官魯氏が盗みを働いたことが明らかになってしまう。また、食べ物があることが周囲に知れば、近所の人が食べ物を奪いにやって来る可能性がある。奪われれば、子どもの命を救うことのできる希望の光りも奪われる。このように、食べ物を手に入れた事を決して知られてはならない情況のために、上官魯氏は豌豆を煮なかったのである。

そして、苦労を経て子どもの命を救う希望の光りを手にした母親は、星明かりの下で幸せに微笑した。この星の輝きもまた、一粒一粒の豌豆のように、希望の輝きを放っている。彼女の微笑みはまるでヒマワリのようにであった。ヒマワリもまた、上官魯氏の子どもの生命が救われることの喜びと、上官魯氏の信念を象徴している<sup>19</sup>。このように、飢饉という死亡の確率が高い現状にありながら、上官魯氏の仕草や行動は希望に満ちた描写となっている。

なぜ、飢餓に喘ぎ、極限状態に追い込まれた上官魯氏に希望があったのだろうか。それは、彼女が母親であることが最大の理由として挙げられる。母親にはあって、母親になったことのない人間にないものは、子どもを生かして養育しようとする信念である。どのような苦難の状況下にあっても、この信念を持ち続けることが、母親の生きる希望となるのである。そして、この希望は、どのような困難な状況下にあっても粘り強く生き、子どもを生かそうとする強い精神力を育むのである。

<sup>18</sup> 莫言『豊乳肥臀』(下) 322頁～323頁

<sup>19</sup> 中国において、ヒマワリの花言葉は信念、光輝、太陽の光りのように輝くこと、生活の充足を意味している。



### 3) 強い感受性を持つ上官魯氏

莫言は「私の小説中の女性は、現在よく見かける女性と苦しい生活や辛い仕事を耐える品格が共通しているが、異なる点もあり、小説中の女性のロマンティズム精神は独特である。」<sup>20</sup>と言った。

鮮やかなロマンティズムは、まさに莫言が作品の中で描く女性の特徴である。現実の生活は豊かであっても、上官魯氏の心の中が豊かであり、どれほど生活が苦しくても幸福や、ロマンを追い求める心がある。どれほど苦勞し、どれほど絶望の淵に落とされても、困難に立ち向かい生きようとする勇気、そして故郷の自然や人びと、彼女の世界を形作る世界全てを愛する心を持っている。

私は、上官魯氏は非常に心豊かな人間であると考え。なぜなら、上官魯氏はいかなる苦難の状況にあっても、祈ることを忘れない人だったからである。以下の引用から、説明していく。

「神よ、マリヤさま。あなた方のお恵みで、この魂をお救いください。..... 絶望の中で、魯氏は希望をこめて祈った。中国の至上最高の神に祈り、西洋の至上最高の神に祈ると、心と肉体の苦痛がかなり柔らかいだろうであった」<sup>21</sup>。

この時、上官魯氏は双子を出産する途中であり、難産の為にかなり苦しい状況であった。なぜなら、姑と夫は驢馬の出産の世話に行ってしまった。姑は鉢と布をオンドルの上に用意しただけで、上官魯氏に「一人でどうにかして産んで」と言い残して行った。双子であることは知らなかったが結果として双子であったため、通常の出産よりも母体に負担がかかり、時間がかかる出産となった。上官魯氏は長時間、一人で苦痛に耐えている途中でこのような祈りを行った。それは、上官魯氏が絶望の中でも希望を見出していたことを表わしている。ではなぜ、夫にも姑にも見放された難産のなか、彼女は希望を見出す事ができたのだろうか。

上官魯氏はこのとき、キリスト教の神に対して祈っていた。彼女が信仰を得たのは、マローヤ牧師に出会ってからである。彼女はマローヤ牧師を愛した。何故なら、彼女に優しく接した唯一の人物だったからである。上官魯氏は、幼少のころより人から与えられる優しさや温もりを知らなかった。そのため、彼女はマローヤ牧師を深く愛してしまったのである。彼女がキリスト教の信仰を受け入れたのも、マローヤ牧師への愛の為にであった。夫も姑も、上官魯氏を人ではなく家畜以下のように扱う。死ぬかもしれない難産の最中ですら彼らは驢馬を優先し、上官魯氏は一人取り残された。このような状況の中、今まさに産もうとしている双子の本当の父親であるマローヤ牧師のことを思った。彼女の祈りは、キリスト教の神にだけでなく、マローヤ牧師が彼女に与えてくれた愛に対しても行われたのである。絶望の中で彼女は希望と、愛することへの信念に満たされていたのである。それは、以下の引用からもわかる。

「彼女は、紅毛碧眼で慈父のようなマローヤ牧師のことを思った。春の日の草原で、あの人は言ったのだ、中国のお天道さまと西洋の神とはおなじ神さまだ、と。..... 花いっぱいのおんじゅの木々。白い花に赤い花に黄色い花..... 群がり、重なり合ったおんじゅの花が、五色の色にヒラヒラと舞い飛び、馥郁たる花の香りがお酒のようにわたしを酔わせた。彼女は自分が雲のように、毛のように漂うのを感じた。彼女は、マローヤ牧師の厳かにして神聖な、優しくかつ穏やかな笑顔を、無限の感激をこめて眺めた。涙が目いっぱい溜まった。目を閉じると、目尻の皺を伝わって、涙が両の耳たぶに

<sup>20</sup> 莫言 「小説的気味 我为什么要写」『紅高粱家族』沈阳春风文艺出版社 2003年

原文：我小说中的女性与我们现在所看到的女性是有区别的，虽然她们吃苦耐劳的品格是一致的，但那种浪漫精神是独特的。

<sup>21</sup> 莫言『豊乳肥臀』（上） 56頁

流れ落ちた」<sup>22</sup>。

これは、出産の最中に上官魯氏がマローヤ牧師との逢瀬を思い返した描写である。咲き乱れる花々がまるで蝶のように辺りを舞い、上官魯氏はマローヤ牧師との愛の行為に陶醉していったことがわかる。これらの描写はまるで現実味を伴っていない。死ぬかもしれない出産中で、上官魯氏が現実から逃避するために、マローヤ牧師を思い描いたとも解釈できる。しかし、現実逃避するだけならば、マローヤ牧師の「厳かにして神聖な」顔を思い描くこともない。上官魯氏がマローヤ牧師の神聖な様を思い出し、涙したのは何故であろう。

一つ考えられるのが、孤独な難産中で、生きる希望に満たされ愛を信じ抜くことの素晴らしさを思い出したからである。現実逃避の甘美な夢に溺れたままであるなら、現実の苦痛に満ちた出産を耐え抜くこともなかったはずである。では、何故上官魯氏はこのように生きる希望に満ち、マローヤ牧師の愛を信じ抜くことができたのであろうか。

それは上官魯氏が、豊かな感受性を持っていたからといえよう。彼女は、えんじゅの木が美しいこと、花々の色が重なり合うようにして咲き乱れるのが鮮やかなこと、太陽の光りが暖かなことを知っていたのである。これらは、感受性の高い人でなければ、えんじゅの木はただの木であるし、花々に対しても何も感じず、太陽の光りも眩しいだけである。しかし、上官魯氏は外界の印象を受け入れる豊かな能力を持っていた。この豊かな感受性がなければ、苦痛の状況下において、苦しみしか見えなくなる。上官魯氏は、この豊かな感受性があったために、絶望の中にあっても、苦痛だけではなく別の事柄を見る事ができた。別の事柄とは、マローヤ牧師との愛であり、その愛を信じ抜くことによって生じる希望である。

1935年の秋、蛟竜河の北岸で草刈りをしていた上官魯氏は、歩兵銃を引きずった四人の敗残兵に輪姦された。上官魯氏は絶望のあまり自殺しようとした。しかし、上官魯氏が絶望の中にあったとき、彼女の感受性が彼女の命を救った。

「ところが、着物の裾をからげて流れに向かおうとした母親の目に、突然流れに逆さまに映った高密県東北郷の青い色をたたえた美しい空が飛び込んできたのである。空には綿のような白い雲がいくつか漂い、褐色の小鳥が数羽、その下で楽しげに泣き交わしている。透明な小魚の群れが尾を震わせて、雲の影の上をすいすいと泳いでいく。何事も起こらなかったかのように、空はあくまでも青く、雲は誇り高く、ゆったりと、白い。鷹がいるからといって小鳥は歌うことを止めるわけではなく、カワセミがいても魚たちはのどかに泳いでいる。汚された心に爽やかな空気がひと筋流れ込んできたように、母親は感じた。手で水を掬って涙と汗で汚れた顔を洗うと、衣服を整えて、母親は家にもどった」<sup>23</sup>。

この描写は、上官魯氏の豊かな感受性が、彼女自身を救ったことを示している。絶望の淵に立たされたとき、果たしてどれほどの人が周囲の景色の鮮やかさに気付けるであろう。豊かな感受性のない人では、己の苦痛にのみ関心がいき、周囲の景色など気にも留めないに違いない。

上官魯氏が自殺を諦めたのは何故であろうか。単に景色の美しさに心を打たれたからであろうか。彼女が目にしたのは、川の水に映った故郷の自然であり、川を泳ぐ小魚や自由に飛び交っている小鳥たちである。そこには、上官魯氏が生まれ育った故郷の自然が放つ生命力が満ちあふれていた。小魚たちはカワセ

<sup>22</sup> 莫言『豊乳肥臀』(上) 56～57頁

<sup>23</sup> 莫言『豊乳肥臀』(下) 314頁

ミに食べられてしまう可能性があり、小鳥たちは鷹に襲われる危険がある。けれども、彼らはその危険を憂慮することもなく、生きることを存分に楽しんでいる風情である。上官魯氏は、この情景に小さな命に溢れんばかりの生命力を感じ取り、絶望に固執することを諦めた。

以上のことから、上官魯氏の豊かな感受性が、彼女の生きることへの希望を支えたことがわかる。

一方、莫言の母親は『豊乳肥臀』中の上官魯氏と同じく、厳しい生活環境の中でさまざまな苦勞をして8人の子供を生み育てていたが、結局子供は4人しか生きられなかった。莫言は『豊乳肥臀』の中で、上官魯氏が子供を出産した後にすぐ農場へ上官家の農作業を手伝いに行った場面と、村の子どもを死なせないために粉挽き場で穀物を呑み込んだ場面を描いているが、それは実際の莫言の母親高淑娟が経験したことであった。しかし、莫言の母親高淑娟には上官魯氏のように、封建社会に反抗する大胆な行動力はなかった。莫言の母親高淑娟は、封建社会の規範に従った行動をしていたのである。

つまり、莫言は母親高淑娟の「母親像」を『豊乳肥臀』中の母親上官魯氏に多分に投影させたにもかかわらず、封建社会の人物であった高淑娟には見られない要素を付与したのである。それが、上官魯氏にみられる「封建社会の常識に逆らうような大胆な行動」だったのである。

#### 4. おわりに

作品『豊乳肥臀』における「母親像」は、閉鎖的な社会に対する反抗心、粘り強い精神力、強烈な感受性、道徳をも破る大胆な行動力といった特色を兼ね備えていた。また、これらの特色のうち、「閉鎖的な社会に対する反抗心」に注目し、これは粘り強い精神力と強烈な感受性を際立たせるために、莫言自身の母親にはない性質を故意に付加したと考えられる。さらに、「閉鎖的な社会に対する反抗心」は上官魯氏の精神性を創出させるだけではなく、封建社会を生き抜く彼女に自我の萌芽さえ生じさせた可能性についても論じた。困難な局面を生き抜く為には強い精神力が必要である。それを支えるものが自我であり、自我こそが社会に反抗していたのである。

莫言の創造した「母親像」は、中国文学界で異彩を放った。それは、上官魯氏が自我を持っていたために、それまでの自己意志に従って行動することのない母親ではなく、彼女自身の選択によって、愛情を自分の愛する人たちに与えてきた「母親像」であった。

本論では、「母親として生きるには何が必要か」ということについて考えてきた。そして、母親として重要なのは、「自我を核としつつ、豊かな精神力と感受性が必要である」と考えた。

一方、一般の読者が上官魯氏から読み取れる「母親像」をどのように捉えたのかということに関しては触れる余裕がなかった。中国文学界において、政府の文芸政策の影響下にあった文学者たちは上官魯氏を批判し、一般の読者たちが上官魯氏をどのように受け止め、またその行動から何を読み取り、「母親像」を思い描いたのか。本論ではこれらの点に関してまだ分析を行っていない。そのため、次の論文では多くの読者の反応を視野に入れつつ莫言の作品分析を行う予定である。

莫言の母親の時代と異なり、現代中国社会において女性が働くことは当然のことである。家庭の中、そして地域社会において、女性は一人でいくつもの役割を担っている。彼女たちは、それぞれの役割をバランスよくこなさなければならない。なぜなら、家庭だけを顧みている会社における昇進に響き、会社の役割のみをこなしている家庭崩壊を招くことになりかねない。

私が数ある莫言の作品の中から『豊乳肥臀』を選び、なお且つその中の上官魯氏を選んだのは、この作品中の「母親像」は、もしかしたら母親になることに不安を持つ現代の女性たちに新たな希望と勇気を与えることになるかもしれないと考えたからである。上官魯氏は、旧時代の観念を脱ぎ捨てた、生命力あふれる「母親像」を我々に示してくれていると思ったのである。現代社会において、多重の役割を果たす母親のための社会環境を整備するには長い年月が必要かもしれない。いかなる困難に遭遇しても希望を持ち

続け、自我を持ちつつ、そこから溢れるばかりの精神力を子どもに与え続ける。このような「母親像」が、母親となることに不安を抱えた女性たちに、希望と勇気を与えると考えたのである。

### 参考文献

- 王俊菊『莫言与世界：跨文化视角下的解读』山東大学出版社 2014年  
蒋林・金駱彬『来自東方的视角』中国社会科学出版社 2014年  
陳曉明『莫言研究』北京华夏出版社 2013年  
寧明『莫言研究書系 海外莫言研究』山東大学出版社 2013年  
萩野脩二『中国現代文学論考』関西大学出版部 2010年  
付艳霞『莫言の小説世界』北京中国文史出版社 2011年  
藤井省三『透明な人参 莫言珠玉集』朝日出版社 2013年  
藤井省三『現代中国の輪郭』自由国民社 1993年  
藤井省三「莫言の人と文学」『文学界』12月号 2012年  
藤井省三・長堀祐造訳『中国の村から：莫言短篇集』1991年  
莫言『紅高粱家族』北京解放軍文芸出版社 1987年  
莫言『豊乳肥臀』作家出版社 1996年  
莫言 吉田富夫翻訳『豊乳肥臀』（上・下）平凡社 1999年  
莫言「かくて私は小説の奴隷となった」『世界』1月号 2000年  
莫言・王尧「从紅高粱到檀香刑」『当代作家评论』第1期 2002年  
莫言研究会『莫言与高密』北京中国青年出版社 2011年  
吉田富夫『莫言神髓』中央公論出版社 2013年  
楊守林・賀立華『莫言研究書系 莫言研究三十年』（上・中・下）山東大学出版社 2013年